

シティーの日系金融コミュニケーションでのオーラル・ヒストリー調査

ジェンダー・クラス・エスニシティの交差点での「ナラティブ」の分析と叙述

酒井 順子

キーワード

オーラル・ヒストリー ジェンダー・クラス・エスニシティ ナラティブ分析
シティー・オヴ・ロンドン 日系金融機関

はじめに

オーラル・ヒストリーは、口述の資料を基に歴史を考察する研究方法として今日では広く認知されてきている。社会史の研究手法として一九七〇年代以降発達したイギリスや、第二次世界大戦以降口述資料館を充実させてきたアメリカのように、国によってその手法に特徴があるが、様々な学問分野で成果をあげてきた^①。また、オーラル・ヒストリーは学際的であるだけでなく、その担い手も多様である。イギリスでは、大学などの研究機関に所属する専門研究家を初め、地域の歴史家、医療従事者、そしてソーシャルワ

ーカーによっても広く使われてきた。同様の研究手法は、日本でも、聞き書き、聞き取りを使う歴史学、社会学、人類学、心理学、教育学、カルチュラル・スタディーズなどの分野で既に使われている^③。

今日の日本においては、異なった分野の研究者達が、口述資料をいかに収集し、分析し、解釈するかを議論しあうことが課題となっている。オーラル・ヒストリーの分析手法や解釈の手法は今も実験的段階にあるといつてよいだろう。その手法を狭く定義せず、実験的手法を繰り返すことによつて、柔軟で多様なテーマや状況に適応できる豊かなオーラル・ヒストリーの方法論が発展していくのではない

かと考える。本稿は、筆者が一九九〇年代初頭から中葉にかけてロンドンの金融街で行ったオーラル・ヒストリー調査³を振り返り、資料収集、整理、分析と解釈の過程を再考するものである。

一、研究の位置づけ

（１）ライフ・ストーリーを使った国際金融の社会史

筆者が行なったオーラル・ヒストリー調査は、イギリスの金融街であるシティー・オヴ・ロンドンで一九七〇年以降その存在が顕著になった日系金融コミュニティの社会史である。イギリス社会史では、シティーの銀行家達がイギリスの支配層の一角を形成してきたため、銀行家達の出自や政治家達とのネットワーク、シティーの文化に関する研究が盛んに行われた。⁵しかし、一九七三年の、「ヨーロッパ共同体」の前身である「ヨーロッパ経済共同体」への加入、さらに一九八六年の金融ビッグバンの断行によって、シティーは「非イギリス化」の過程をたどってきた。シティーがそのような大きな変化を遂げ始めてからは、人類学的手法により、その変化を見る研究が出てきた。特にデイヴィッド・キナストーンは、企業の資料、個人文書など膨大な資料に加えてシティーの銀行家達にインタビューを行い、一八一五

年から今日までのシティーの包括的歴史を著した⁶。また、大英図書館内にある「ナショナル・ライフ・ストーリー・コレクション（以下NLS Cとする）」でもシティーの銀行家達のライフ・ストーリーを収集するプロジェクトが一九九〇年代に実施され、変わりゆく金融界で働く人々の声が聞き取られた。統計や文書記録には現れにくい人々の声を聞き取る手法は、シティーの歴史研究にも応用できることが確認されたのであった⁸。筆者によるシティーの日系金融機関のオーラル・ヒストリー調査もまたNLS Cの研究と関連して始められた。

（２）マイクロ・ワールドにおけるナラティブ

マイクロ・ワールドの研究は人類学者のフィールドワークによって行われるが、ライフ・ストーリーに特に焦点をあてることの利点は、当事者の言葉をそのまま聞き取り、考察することができる点にある⁹。筆者の行った調査の場合、コミュニティの中の声の実に多様であり、そうした多様な声を分析するために「ジェンダー・クラス・エスニシティ」の概念を用いた。

「ジェンダー・クラス・エスニシティ」はそれぞれ膨大な議論が積み重ねられてきた概念であるが、これらの三要素を交差させて社会あるいは社会史を見ていくことは一九七

○年代以降発展してきた方法である。一九七〇年代半ばには、ナタリー・ゼーモンリデーヴィスが、女性の歴史を考察するには、男女の関係性を見ていく必要があることを指摘し、ジェンダー史を主張したが、イギリスでは、雑誌『ジェンダーと歴史学 (Gender and History)』を一九九〇年に創刊したレオノア・ダヴィドフが、キャサリン・ホールと共に、バーミンガムとエセックスの起業家家族を研究して、経済的、政治的、そして社会的な変動があった一八世紀末から一九世紀初頭にかけてのミドルクラスの家族内におけるジェンダー関係を描き、クラスとジェンダーが絶えず相互に影響しあっていること、つまり階級意識はいつもジェンダー化されていることを実証した^①。社会史においてクラスとジェンダーを交差させて検討することは、一九七〇年以降のイギリスにおける社会調査におけるジェンダーという分析軸の導入とも並行するものであった^②。オーラル・ヒストリーの手法においても、ポール・トンブソンはダニエル・ベルトールとともに、階層移動にジェンダーがどのように働くかを、家族内の女性の役割や感情の働きを評価して、実証的研究を試みた^③。

さらに、キャサリン・ホールは、ジェンダーとクラスだけだけでなく、歴史解釈の分析軸としてエスニシティを入れていくことの重要性を一九九〇年代に主張した^④。彼女自身の

研究事例は一九世紀のイギリスと西インド諸島の植民地との関係をみたものであるが、今日のイギリス社会学では、多様なエスニック・コミュニティを検討し、エスニシティが、ジェンダーやクラスとどのように作用しあっているかをみることはますます重要になっている^⑤。社会史においても、ジェンダー、クラス、エスニシティがどのように交差しているかについて事例を検証するかが課題の一つである。

ロンドンの日系ビジネス・コミュニティで働く人々をエスニック・マイノリティ・グループとしてとらえることには異論があるかもしれない。しかし、アングロサクソン文化の支配するシティーでは彼らは新参者であるという意味でマイノリティである。また、一九九七年に社会学者ロビン・コーエンが、「グローバル・ディアスポラ」の概念を使って、グローバリゼーションに伴って拡散しつつある、日本や中国のような経済的なコミュニティもディアスポラとして検討していく必要があることを指摘している^⑥。「ディアスポラ」は、離散するユダヤ人の移動を示す言葉として広く使われているが、元来はギリシア人の植民都市への移動を示す言葉であった。最近では、スチュアート・ホールやポール・ギルロイなどのカリブ系の文化学者をはじめとして、「ディアスポラ」を近代における黒人の世界への拡散を示す言葉として用いている。しかし、「ディアスポラ」はコーエンが

指摘したように、黒人だけでなく、多くのエスニック・グループに見られる現象である。鎖国イメージにみられるように、日本人はディアスポラとは無縁の民と思われがちであるが、別府晴海も日本人が一六世紀以来世界に拡散していることを指摘しているように、国境を越えて移動をする日本人はいつも存在したのである。ロンドンもまた日本人の移動先であったが、あまりにも経済イメージが強く、これまでは日系コミュニティはエスニック・コミュニティとしては考察されてこなかった。しかし、地理学者ポール・ホワイトにより、イギリスの日系コミュニティの研究が行われているのを初め、ロンドンにおける日系コミュニティの社会的研究も始められている。ようやく、日系コミュニティも、そこで生きる人々をみていく研究の対象となってきたのである。

さらに、分析と解釈にあたって筆者が参照した視点はスチュアート・ホールの支配的言説に関する議論である。ホールは、「イギリス的なるもの(Englishness)」という概念を用いて、実際には多様な人々が多様な視点を持っているにもかかわらず、同質的で本質的なイメージが構築される過程を明らかにし、エスニシティの多様性が社会的に受け入れられ始めた「一九九〇年代まで、イギリス人であることと黒人であることが両立しなかった」ことを指摘した²⁰。

多様性があるにも関わらず、その多様性を覆い隠す支配的言説は日本でも一九八〇年代から一九九〇年代にかけて広く流通した「日本文化特殊論」として現れ、多様な日本中の言説を覆い隠す役割を果たした。「日本文化特殊論」は後に批判されたが、日本版支配言説ともいえる「日本人論」は、イギリスでホールが批判した「イギリス的なるもの」に相当するものであった。一方、イギリスのみならず海外の日本研究は、日本人とそのコミュニティをただ経済的研究の視点のみからとらえる傾向があるため、コミュニティ内の多様性は見過ごされ、単一イメージで日本人が語られがちであった。ジェンダー・クラス・エスニシティを分析軸にすることによって初めて、日系コミュニティの単一イメージを覆うことができるのである。

さらに、ジェンダー・クラス・エスニシティによって分断された人々がその境界を越えようとするときに、文化と文化の間を移動することで生じるアイデンティティの葛藤があきらかになる。アイデンティティとは、スチュアート・ホールによれば、「自分はだれか」という認識であり、「自分がどこに所属するか」という認識である。さらに、近代においては、デカルト以来、アイデンティティは固定したものととらえられてきたが、現代においては、アイデンティティは固定せず、揺れ動いて、絶えず変化している

と指摘している。グローバルゼーションの進行によって人々が移動するようになり、もはや一つの場所に所属するだけで人生を終えることはできなくなっているのである。グローバルゼーションの進行によって、日本人男女がアングロサクソン文化の中に入り、また逆にイギリス人がシティーの新参者である日本企業で働くとき、彼らは新たな主観的秩序をその語りの中に構築していかなければならなくなったのである。もはや「日本人」であるという固定したイメージは持てなくなっている。現代を代表する文化学者の一人といえるホーミ・バーバーも、文化の境界にある「第三の空間」にこそ可能性があると書いているが、およそ文化とは縁のないように見える金融業にも「第三の空間」が生じ、無味乾燥な金融業で働く人々にも越境するアイデンティティが生まれつつあった。

(3) インタビューの解釈における諸立場

オーラル・ヒストリー研究においては口述資料をいかなる観点から解釈していくかが大きな問題である。オーラル・ヒストリーの方法論を概観する書としては、ポール・トンブソンの『記憶から歴史へ』(酒井順子訳、原著 *The Voice of the Past*) が今日でも最も包括的なものであるとケン・プラマーも評価しているが、ポール・トンブソンは、オー

ラル・ヒストリーの解釈の方法は歴史再構成法とナラティブ分析の二種類に大きく分けている。歴史再構成法とは、「ライフ・ストーリー・インタビューを、社会的文脈や社会を構成する要素がいかに機能し、かつ変化するかについて詳細に再構成するために使う」(ダニエル・ベルトール)のエスノ社会学にも近似しており、インタビューに現れた事実に対応する部分を、他の文献資料や複数の証言を参照して再構成する方法である。再構成法には、トレバー・ラムスがイーストアングリアの漁民家族の幼児死亡率とクラスとの関係をインタビュー資料から数量化して立証しようとした例のように、インタビューに現れた情報を用いて社会を構造化して理解しようとした方法もあった。しかし、多くの場合、オーラル・ヒストリーはインタビューをテキストとして解釈して歴史を再構成する方法をとる。しかしながら、こうした歴史再構成法による口述資料の解釈に対しては、人々が話す言葉は単純にそれが事実を語っているものとは考えられないという批判が強い。そうした実証主義歴史家達の批判に対しては、ポール・トンブソンが『記憶から歴史へ』において、口述資料は他の資料によって批判的に検証できる、また文献資料や統計的数値であってもバイアスがあることは明白であると、既に反論をしている。さらに文献資料が元々口述資料であった例は非常に多いことも指摘して、

口述資料を批判的に用いていくべきであるのは文書史料と同じであることを指摘して批判に答えている。また、語られたストーリーの一貫性を見ることで、口述の資料は何らかの事実を反映していることをみることができるとも反論している³²⁾。

一方、今日では、インタビュ어의語りそのものに焦点をあてて、分析解釈する「ナラティブ分析」の方法が口述資料の解釈方法として極めて盛んになってきている。「ナラティブ」の定義は、文学、心理学、言語学、社会学などの異なる学問領域においてそれぞれ異なっている。ポール・トンブソンはオーラル・ヒストリーにおけるナラティブ分析を、「口述のテキストとしてのインタビュ어의ものと、語られる言語、そのテーマと繰り返し、そして沈黙から学ぶことである。この方法は、結局のところ、語り手がどのように経験し、記憶し、ライフ・ストーリーをいかに語るかというように、そしてそうした語り方が、より広い社会意識をどのように反映しているかということに関心を持つものである」と定義している。さらに「ナラティブ分析は、普通は、語り手の経験がどれほどその集団において典型的なものであるかどうかを評価することを目的とはしない」のである³³⁾。

現在、オーラル・ヒストリー研究者が使うナラティブ分

にどのように影響を与えているのかを見る方法や、語り手の語る言語の構造を見る方法など非常に体系的な方法まで多様な方法が試みられている。一九九一年に出版された『私達を導く神話』³⁴⁾は、人々の思いこみや日常生活において神話化されたストーリーに注目して事実とのギャップを考察したものである。なかでもアレックスサンドロ・ポッターによるイタリアの民衆運動の記憶と歴史的事実のギャップを見る方法は、オーラル・ヒストリーの言語論的転回といえるかもしれない³⁵⁾。また、ライフ・ストーリー研究で知られるケン・プラマーのホモセクシュアルの人達へのインタビュ解釈の手法も、ナラティブを社会的文脈の中に入れていく方法をみているといつてよいだろう³⁶⁾。サマーフィールドが第二次世界大戦中の女性達の経験についてライフ・ストーリー・インタビュ어를行い、戦争中の労働を積極的に評価するナラティブを語った女性達と、評価しなかったナラティブを語った女性達のグループに分けて女性達の戦後の生き方と関連つけた研究もナラティブと体験の関連に注目したものである³⁷⁾。また、アリスティア・トムスンのように、国の集団的祈念行為と個人の記憶のナラティブとの比較をした研究もある³⁸⁾。メアリー・チェンバレンの西インド諸島出身の

移民家族三世代のインタビュ어도ナラティブを吟味することによって、移民のアイデンティティの葛藤をみたものである。⁽³⁹⁾このように今日のオーラル・ヒストリー研究は、ナラティブ分析の可能性を積極的に取り入れようとしている。

さらに、オーラル・ヒストリー調査で得たインタビュート分析の第三の焦点は、インタビュート時の心理的状况である。インタビュートによる資料は相互作用によって成立するものであって、いついかなる時にも同じ資料が生じるわけではない。イギリスでは、ポピュラー・メモリー・グループが「破構成／感情の乱れ (discomposure)」（筆者の訳語）という概念を用いている。「compose」には「構成する」という意味と「平静」という意味があるが、インタビュートにおいては、インタビュートとインタビュート（インタビュートをされる人）の相互作用で関係性が平静さを失うときがあり、その時にストーリーが構成されるので、インタビュート時の「インタビュートとインタビュートとの間の関係性」(intersubjectivity) に注目しようというものである。⁽⁴⁰⁾

心理学者クヴァルは、実際に書き起こしをした後に、インタビュートを前にして分析方法について考え込んでいくのは通常のことであると言いつける。インタビュートの理解にはレベルがあり、最初は自分でインタビュートの語ったことの意味を理解し、次に常識的な理解をし、さらに理論的な

理解をすると彼は指摘している。すなわち、インタビュートのなかにあるストーリーの層を異なるレベルで順に理解して最後に総合するのである。⁽⁴¹⁾オーラル・ヒストリーのインタビュートの手法についての実証的解釈、ナラティブ分析など異なる解釈理論が提示されているが、実際のところ、単独の手法でインタビュートを解釈することは現実的ではない。どんなライフ・ストーリーにも事実としてあったことを述べている部分と事実に関する注釈やその時の感情が入り交じっているものである。したがって、今日のオーラル・ヒストリーの分析方法は、どれかに特化して用いられることはあっても、相互に排他的に用いられるものではないと思われる。

このようにして、筆者は、まずインタビュートとインタビュートとの相互作用、次に歴史の再構成、インタビュートのプロフィール、異なる労働文化の語りを検討し、それが実際のところ、ジェンダー・クラス・エスニシティのストーリーの検討となったのだが、それらのストーリー相互の関係性を検討したのである。さらにストーリーが語られる中でインタビュートが垣間見せたアイデンティティの葛藤について検討をした。最後にそれらの解釈を総合して、インタビュートの「ナラティブ」の全体的な解釈を提示してみたのである。

二、調査の方法

筆者による調査は、一九九二年と一九九四年から一九九五にかけてロンドンで行われた。インタビュイー達は、シティーにある日系金融機関で働いていた、あるいは以前働いたことのある日本人およびイギリス人の男女百名である。インタビュイーの内訳と年齢は（表1）の通りである。

調査の依頼は、まず手紙を在ロンドン日系金融機関に送ってなされたが返事はなかった。従って、インタビュイーへのアクセスはスノーボール方式（インタビュイーに次のインタビュイーを紹介してもらう、あるいは他から紹介を得て新たに次のインタビュイーを紹介してもらうというやり方を重ねて、数を増やしていく方法）をとった。これは「データ対話型理論」でいうところの戦略的標本抽出法であった。具体的には、友人、親戚、大学関係者にシティーで働く知人に紹介していただいた。こうした人々は自分の所属するネットワークから、あるいは部下達から、インタビュイーを紹介してくださった。興味深いことに、日本人上司がイギリス人の部下を紹介して下さることはあったが、イギリス人から日本人への紹介はなかった。スノーボール方式によって、インタビュイー達のネットワークが異なっていることもわかったのである。

表1 インタビュイーの数

	20代	30代	40代	50代	60代	?	
日本人男性派遣社員	2	7	23	14	1		47
日本人女性派遣社員	5		2				7
イギリス人男性管理職		5	6	1			12
イギリス人女性管理職	2	1	2				5
イギリス人男性事務員			1				1
イギリス人女性事務員	3	2	1				6
日本人現地雇用男性				1			1
日本人現地雇用女性	1	3	7	2			13
日本人派遣社員妻		1	1				2
シティーの銀行家	1		1			4	6
合計	14	19	44	18	1	4	100

インタビュアーは半構造化面接で行ない、質問の大半は決めておいたが、話し手の話したいことをできるだけ話してもらおうようにした。それぞれのインタビュアーはイギリス型ともいえる短いライフ・ストーリーである⁽⁴⁾。しかし、インタビュアーのなかには3、4時間続いたり、再度訪問したりすることも度々あった。

インタビュアーは元の言葉遣いを尊重して書き起こし、テキストとして読み、分析をしていく方法を探った。また、インタビュアーをした後にフィールドノートをつけた。このフィールドノートは調査の資料としてだけでなく、調査の方法の軌道修正、標本抽出への考察、さらに関連研究書の議論への考察なども入れておいた。

三、分析の過程

分析にあたっては、まず書き起こしを何度も読み返すことから始めた。その後、事実に関する記述、個人の人生、そしてその奥に潜む人間関係、希望や挫折そして所属意識、アイデンティティの揺れと徐々に「ナラティブ」の深層にはいつて分析していくことを試みた。以下、順に振り返ってみる。

(一) インタビュアーとインタビュアーとの相互作用

今日のインタビュアー調査においては、インタビュアーとインタビュアーとの相互作用によってストーリーが形作られる構築過程が存在するという点に於いて大方の意見は一致している⁽⁵⁾。この調査においても同様であった。インタビュアーは当時留学中であり、日本人の海外派遣社員や現地雇用社員達とは共に海外で言葉や習慣、考え方の違う中で苦勞しつつも成果を上げようとしているという点で共通の磁場ができあがり、その磁場に沿ったストーリーが聞き取られた。また、聞き取りとジェンダーの関係は既に指摘されているが、インタビュアーのジェンダー、エスニシティ、クラスの属性がインタビュアーの内容に影響を与えたことは確かである。エスニシティ、つまりどの文化に属しているかという主観的認識に関しては、インタビュアーは日本人インタビュアーと共通のエスニシティに所属し、イギリス人に対してはお互いに他者としての関係でインタビュアーをした。しかし、インタビュアーが女性であり社会人学生であったことから、日本人派遣社員の中核グループにはいりにくいという点で、イギリス人社員と共通の立場に立つことが可能であった。イギリス人女性とは同じ女性であったことから、フェミニニティ（女性性）を比較する話を聞くことができた。日本人およびイギリス人の男性管理職の人達との関係には、何とか論文をまとめたいと思ってい

る留学生への庇護的な感情が働いていた。しかし、もし若い男子留学生が聞いていたら、より会社経営や金融論に関する話ができたかもしれない。逆に女性であるインタビュアーが聞いたことにより、個人の内面と仕事の話を聞くことができたと思われる。

また、インタビュ어의時期や場所も考慮に入れて考察されなければならない。このインタビューは一九八〇年代後半の積極的な国際金融への投資が失敗に終わった一九九〇年代初頭に行われており、インタビュイー達、特に管理職社員は、バブル崩壊に深く心を奪われていた。一九七〇年代からの金融国際化のかけ声と共に国際金融を専門としてきた日本人派遣社員達、特に欧米を担当してきた派遣社員達は、企業内で自分を生かすことが難しくなった。また現地雇用のイギリス人および現地雇用の日本人は、合併やロンドンからの撤退の噂の中で職を失う可能性を憂慮していた。そうした時期的な状況が彼らの人生を振り返る態度に影響を与えたことは間違いない。インタビュ어의場所とストーリーの内容に関しては、会社内で聞いた時には、個人の家庭生活よりも仕事中心のライフ・ストーリーとなった。このように語られたときの時期や場所もインタビュ어의内容に影響を与えていた。

聞き取られたストーリーは、インタビュ어時の条件下で

創出されたが、このことは口述資料の信頼性を損なうことではなくて、口述資料もまた文献資料と同様に、資料が作られた時の状況を批判的に検討しながら扱うことによって、資料の創出過程を相対化させて研究の客観的価値を高めていくのである。

(2) 歴史の再構成—時間軸を定める

語られるライフ・ストーリーには、事実に関する部分と語った事実に対する注釈が入っている。そして、事実に関する部分は、他にある文献資料や複数のインタビュイーの話と相互参照することによって、大きな歴史の軸に個人の人生を位置づけていくことができる。

シティー・オヴ・ロンドンには、イギリスの金融の中心地であったが、一九七〇年代から金融ビッグバンを経て非イギリス化が著しく進行したことは既に述べた。一方日本の現代史に焦点を当てると、一九七三年に円の固定相場制が廃止され、日系金融機関は海外に拠点を広げて国際金融ビジネスに参入していった。その結果、日本人の海外ビジネス・コミュニティが拡大し始めたのである。さらに、一九八五年のプラザ合意により、合衆国によって円高政策が採られると、日本円が過剰供給の状態になり、資金輸出国となったのである。そして、スワップやオプションとよばれ

る新たな金融技術を急遽取り入れたり、他国の金融機関や政府との交渉を要する国際シンジケートローンに参加したりして、日系金融機関はロンドンやニューヨークでグローバル金融ビジネスに果敢に参入していったのである。筆者のロンドンにおけるインタビュ調査は、そのように二つの国の歴史がシティー・オヴ・ロンドンという場所で接点を持ったときの、そこで働いた人々のライフ・ストーリーの収集であった。

二つの国の歴史が出会う場所で、人々のライフ・ストーリーを聞いていくと、語られるストーリーは既存の学問言説と一致しないことが発見された。一九九〇年代においては、また日本の奇跡的な経済発展に関する言説が広く流通しており、金融においても、日本の護送船団行政や日本の経営への神話が残っていた。一方イギリスでは、日本の経営が産業の育成を図ったというロナルド・ドーアの『イギリスの工場、日本の工場』⁽⁴⁸⁾に始まる日本の経営論が優勢で、経営の「日本化 (Japanization)」が経営学の大きなテーマであった⁽⁴⁹⁾。しかし、インタビュに現れたのは、こうした議論とは全く逆のストーリーであった。すなわち、日本の金融業は成功していないと、日本人とイギリス人の双方が語り、日本の経営方式はグローバル経済に適合しないとシティーの金融人達は語っていた。オーラル・ヒストリーの

インタビュは、既存の学問言説を覆すような強力な資料を生み出すことがあることをポール・トンプソンは紹介しているが、筆者のインタビュの結果は、「日本の経営論」や当時のイギリス経営学の主要テーマであった「日本化」という既存の学問言説への疑問を投げかけたのである。人々の「ナラティブ」は学問的言説に先行していたのである。

(3) インタビュイーのプロフィール

次にインタビュイー達のプロフィールについて考察をした。インタビュイーはエスニシティとジェンダー、そしてクラス⁽⁵⁰⁾によって異なるグループに分かれていた。それぞれのグループは、職種が異なるだけでなく、社会的背景、文化、ネットワークなどが異なり、グループ間は分断されており、その間にコミュニケーションはほとんどないようであった。コミュニケーションの断絶をあるイギリス人の社員は以下のように説明していた。

このビルの中にはほとんど二つの銀行があるといえます。ヨーロッパの銀行と日本の銀行です。私達は同じビルの中で働いていて、隣り合わせに座っているけれど、ほとんど混じり合うことはありません……………

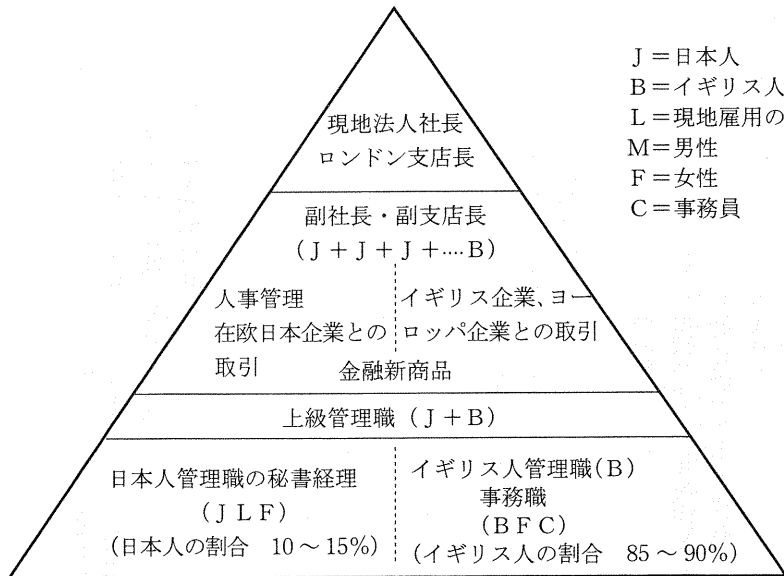
ヨーロッパ人は九時に会社に来て、五時半か六時に帰り

ます。そして、日本人は朝九時に来て夜は九時か一〇時ぐらいに帰ります……一つの銀行の中にほとんど完全に分離した二つの銀行があるのです(インタビュール七八、三〇代イギリス人男性マネージャー)。

ここで描写されているように、日系金融機関は、エスニシテイによって別れた二つの組織が並立して、一見均質に見える一つの組織をなしていた。さらにインタビュールを進めていくと、その構造は単に日本人対イギリス人という概念だけでなく、職場でのクラスやジェンダーもからんで、極めて固定された構造を持っているかのように語られた。図1は人々が「語った」職場の組織構造である。

インタビュールで得た情報では、ロンドンのほとんどの日系都市銀行は従業員が二〇〇人ぐらいの規模で構成されており、この図で示されるように、そのうち大半がイギリス人の女性事務員であった。日本人女性事務員は、ほとんどが現地採用者だった。彼女達の多くは日本で高校卒業後何年間か働いて得た貯金を使って英語の勉強に来てそのまま滞在した人達であった。日本人派遣社員は会社全体の一〇〜一五パーセントを占め、ほとんどが男性であった。彼らは、会社の意思決定機関を確保し、本社・本店との連絡を取っていた。イギリス人男性は、シティーのビジネスに通じた

図1 海外にある日系金融機関の組織構造



上級管理職と、実際の業務を担当する中堅実務家達だったが、中間層が最も日本人とイギリス人の競争が激しいところであり、金融ビジネスのあり方を巡って対立していた。

対立は、日本人とイギリス人との間だけではなく、上司と事務員の間、男性と女性の間にも存在した。例えば、組合活動を激しく行つたがために、毎日小切手の数字をチェックする閑職に配置されたイギリス人男性事務員は、日本人上司よりも自分の配置を直接申し渡したイギリス人男性管理職に不満を持っていた。また、日本人の現地採用女性達は、日本から派遣されてきた男性社員に対する強い不満と自分達にもっと機会を与えてほしいという期待とを二重に持っていた。

このように、マイクロ・ワールドは、ジェンダー・クラス・エスニシティによつて分断された場となり、人々は「自己」と「他者」の意識を先鋭化させてライフ・ストーリーを構築していた。

四、分析

このような環境で働く人々のストーリーは、文化の違いについて語るものが多かった。そしてそれぞれの人々が自ら描いた文化の葛藤の地図に自分を位置づけようとしてい

るようであった。以下、順に、エスニシティ、ジェンダー、クラスのストーリーがいかに語られていたかを紹介し、さらにそれぞれが相互に作用しながら、ストーリーを形成していたことを指摘したい。

(1) エスニシティのストーリー

エスニシティとは同じ文化に所属するという主観的認識であるが、文化的所属意識は中堅の男性社員の間で最も頻繁に語られた。その多くは、五時以降まで働くか否か、集团的に決定するか、トップダウンで意思決定をするかどうかに関わるものだったが、単に働き方の違いだけでない、「本質的な文化」論に発展していた。例えば、日本人が「他人達から学ぶ」のは「明治維新以来の私達の伝統」だと断定し、「日本の銀行では行員は同質的な文化を持っているんですよ」と主張した(インタビュー九、四〇代日本人男性派遣社員)。彼は過去に起源を求める「伝統の創出」を行い、「日本人は農耕民族、イギリス人は狩猟民族」という比喻を用いた。一方、イギリス人の男性社員は、個人主義の優越を語っていた。シティーの法律家から日本の企業に法律顧問として入ったイギリス人男性は「日本人の足は一列に並んでいて同じ方向に一斉に動くけれど、イギリス人の足はバラバラな方向を向いて、バラバラに動いている」(インタ

ビュー四八、五〇代イギリス人人事マネージャー」と語っていた。こうしたエスニシティのストーリーでは「イギリス人」対「日本人」というエスニシティのステレオタイプが構築されていた。

(2) ジェンダーのストーリー

ジェンダーとは、社会的に構築された性差のことであるが、ジェンダーに関するストーリーも頻繁に語られた。日本を出てイギリスに移住し、最終的に日本企業で就職先を見つけた女性達は、一様に日本社会におけるジェンダー差別を語った。その中のある女性は、職場の男女差別が激しく、「女は目立たないように振る舞わなきゃいけないんだ」と言われ、職場で自分を生かす場がないと思い、「日本の社会を嫌っていて、毎日毎日、日本を出ることばかり考えていました」(インタビュー一四、四〇代日本人現地雇用女性)と語っていた。別の四〇代の女性は、大学英文科を出て就職したが仕事がだんだんと単純作業になり、最後にはフアイル整理のみが彼女の仕事になっていったという。明らかに彼女を退職させようとする圧力であった。さらに、ある五〇代の女性は、男性の同僚以上に働いたが同僚の男性と給料の違いが大きいことに対し、上司に直接抗議をした。しかし、上司は家族を養うべき役割を担う男性は若くても「家

一方、イギリス人の女性は、職場におけるジェンダーの差も生活上のジェンダーの差も私には語らなかつた。イギリスにおける研究書では、依然として金融業の職場における男女差別の存在を指摘しているにもかかわらず、イギリス人の男女が私に語ったジェンダーのストーリーは、日本の社会はジェンダー関係において、約五〇年遅れているという進歩主義的な考えからみたものであつた。またイギリス人女性は日本人男性のジェンダー差別を強く非難していた。ある二〇代の女性管理職は、「日本人のボス達は、私の部下である彼(イギリス人男性)が私のボスだと思う」(インタビュー五二、イギリス人二〇代女性マネージャー)ことに反発していたが、日本人男性が性差別をするというストーリーは広く流通しており、事実筆者の調査中にも、日系企業での性差別が労働裁判になっていった。

こうした批判にもかかわらず、日本人の男性達は、ジェンダーの問題なんてないと言いつつ、例えば、二〇代の男性は、「僕は自分を男としては考えないですよ。僕は個人です。他の人は僕を一個の人間としてみますよ。男としてみるんじゃないですよ」(インタビュー二七、二〇代日本人男性派遣社員)と、男性であることを取り上げることが拒

否した。

このようにジェンダーのストーリーの使い方はグループによって異なっていた。日本からイギリスに個人で移民していった女性達は、ジェンダーによる差別を彼女達の移民の動機として使い、イギリス人の女性達は、日本人ボスに対する不満を語った。そうした「日本人の男性≠性差別主義者」というステレオタイプのストーリーに反発して、日本人男性は「ジェンダーによる差別なんてない」と言いきるのである。

(3) クラスのストーリー

クラスに関するストーリーはイギリス人社員の間で頻繁に語られていた。特に労働者階級出身のイギリス人社員がシティーで働くようになったことが「世代間階層上昇のストーリー」として語られていた。例えば、炭坑夫の息子だったある男性の場合は、父親は炭坑で働くことを息子に求めたが、母は衰退する石炭産業で働くことに息子の未来はないと考えて、息子に大学に行くように強く勧めた。息子も炭坑で働くことは、「ひどい仕事だと思ってたんだ。決して気持ちのいい仕事ではない。自分は父親が夜遅く帰ってきて、朝早く仕事に出かけるのを見ていた。だけど生活程度はよくなかった。決して、開けた人生ではなかった」と考

えていた。彼は家からできるだけ遠くの大学を選び、できるだけ家に帰らなかった。大学を卒業するとまた家からでるだけ遠くに就職をしたという。結局彼は地方公共団体に就職したが、さらに可能性の大きい私企業への就職を目指して働きながらコースに通い、人事マネージャーの資格を得た。そして、彼はシティーにある日系の金融機関が人事マネージャーを募集していることを知り、応募して採用された。彼は、

自分が州の役所の上司に報告したら、彼らは僕が転職できることに驚いていた。そして、たぶん、僕が思うには、少し嫉妬をしていた……僕のところの部長は、パブリックスクールの卒業生でケンブリッジを卒業したのだけれど、パブリックセクターで働いていた人だった。僕が思うには、彼は自分こそシティーで働きたいと思っていただろう。なぜかかっていうと、彼は自分が僕よりもいい環境で育っていると思っていた。シティーで働くには僕なんかよりもっとふさわしいバックグラウンドだったんだ。彼は実際にはそんなことは何も言わなかったんだけど、だけと言ったんだ。「よし、シティーで仕事を見つけたとは君は本当によくやった。私は、君がオフィスに行くとき、ロンドンブリッジを歩いて渡っているところ

るを、これから時々思い浮かべるだろう」って。だけど、

わかるだろう、彼が同じようなチャンスをつかみかかったってことははっきりしている（インタビュー五八、三〇代イギリス人人事マネージャー）。

この男性は、上司が自分を嫉妬していたと話し、アッパー・ミドルクラス以上の子弟が受ける教育歴をもつ上司を飛び越えて、シティーの銀行で働く機会を得たことを誇らしげに語った。彼の話に出てくる上司の嫉妬は彼の心の反映である。

また、ロンドンのイーストエンドの港湾労働者の息子も、貧しい子供時代にはシティーで働くなんてあり得ないと思っていた。しかし、シティーで事務職の仕事を得たので、彼の両親は彼を誇りに思っていた。特に彼の「お父さんが（そう思っていた）……なぜなら、僕はシティーで働いているし、オフィスの仕事だし、手が汚れない仕事なんだ」（インタビュー六五、四〇代イギリス人男性事務員）と語っていた。

こうした「階層上昇のストーリー」は日本人にはなかった。派遣社員達は一様に階級など存在しないと云いきった。上司も部下も一緒になって働く日本の社会は平等な社会だと言いつけるのであった（インタビュー二、三〇代日本人男

性派遣社員）。

日本人の男性は日本には階級がないと言いきっても、女性達は階層間の壁の厚さを強調した。例えば、ある五〇代の女性は、「日本では、人がある程度年をとったら、人は私達について話すのよね、特に女性についてね。この人は、まだ結婚してないとか、あの人は派手な服を着ているとか、年の割に楽しみすぎているとか」と批判するという規制があると話し、「女性が意見を言おうと思ったら、一流の大学を出ていて、男性と同じ地位についていなければいけないのよ。もし、女性がそんな地位に憧れようと思ったら、そうした人生のコースにのっていなければならぬのよね。たとえ、外からその人生のコース内に入ろうとしても、絶対に入れないの。その人には意見を言う機会させないのよ。自分の考えを示す場もないのよ。もし、機会が与えられなければ、彼女には何にもできない……」と階層があることを主張していた（インタビュー一三、五〇代日本人現地雇用女性）。

このように日本における階層の壁を感じた女性達は、移民をしたり、資格を取ったりして、「努力」することによって壁を越えようとするストーリーを語ったが、派遣社員の男性は、そのような「努力」ということを強調しなかった。彼は、「人は、困難を抱えていると思われる人に同情をした

り、可哀想だと思つたりする。しかし、(自分は)質の良い仕事をスマートに素早くできる」人間であるにとらえていた(インタビュー九、四〇代日本人男性派遣社員)。この話を語つた男性は、大地主の子孫で父や兄弟は東大出身と語つていた。子供時代の生活も個人でイギリスに渡つた女性達よりもはるかに豊かなものだった。豊かな階層に育つた人の美意識であらう。

このように、エスニシティやジェンダー、そしてクラスの話はライフ・ストーリーを語るときに何度も参照される概念であつた。分断された職場では、自己と他者を意識しあい、自分の所属するグループと自分が所属し得ないグループとを対比させて語るることによって自分の位置を確かめていた。

(4) ジェンダー・クラス・エスニシティの交差点での

ストーリー

こうしたストーリーを聞いて気づくことは、ジェンダー・クラス・エスニシティに関わるストーリーがそれぞれ単独では現れていないことである。例えば、日本の社会のジェンダー差別を訴えた日本人女性の一人は、イギリスにこそ強い女性がいて、自由があると語っている。また、日本人男性はイギリス社会との比較において、日本は無階級社会

と語つていた。人々は、ジェンダー・クラス・エスニシティという概念を用いるときはデフォルメして内面化し、自分を位置づけていたのである。

そうした、自己の位置づけの表現は「競争」であつたり、「嫉妬」であつたり、「あきらめ」であつたりするが、時に誇張した話となつていく。例えば、妻を夜遅くまで起こしておく日本人男性の話である。この話を語つてくれたのは、イギリス人の男性管理職である。

ある晩、彼(日本人の同僚)がカラオケに行きたいかときいたので、「うん、でも僕の妻に先に電話をしなれば」と答えたんだ。彼はなぜ聞かなければいけないんだと僕に聞いた。だから、僕は遅くなつてもいいかどうか聞かなければいけないと言つたんだ。そしたら、またなぜだと聞いてきた。彼が言うには、彼は一度も妻に遅くなつてもいいか聞いたことなんか無いと言ふんだ。僕の場合、もし聞かなかつたら、家に帰つたら、ドアには鍵がかかつていて僕は閉め出されるだろう。これは彼とは違つた夫婦関係で、彼には理解できなかったんだ。というの、彼が言うには「僕は夜中の二時頃家に帰つて、もしも妻が寝ていても彼女は起きなきゃいけないんだ。もし僕が何か食べたかつたら妻は何か食べ物を用意しな

ければいけないんだ。朝には彼女は起きて、僕の朝ごはんを用意し、僕が定刻までに会社に着くようにしなければならぬんだ。それが妻の仕事なんだ」。彼はまだ三六か三七なんだよ。僕には彼がとても伝統的な日本人に見えるよ（インタビュール五三、三〇代イギリス人男性マネージャー）。

この話のなかの家庭が実際にはどうであつたかは重要ではない。ここには亭主閑白を誇らしげに語つたという日本人の派遣社員のストーリーとそれを私に語つたとイギリス人男性のストーリーがある。後者はパブリックスクール出身で、期待を持って日本企業に入つてきた。しかし、実際に仕事してみると、自分よりもシティーの金融業がわかつているとは思えない同僚の日本人派遣社員が東京やニューヨークに昇進して転勤していくのを眺めていなければならなかつた。二人の間の仕事上の競争は、マスキュリニティー（男性性）の競争となつて表現された。そしてその競争は、彼らが所属していると思つてゐる文化に見られる典型的な夫婦関係のストーリーを参照しながら語られたのである。言い換えれば、ジェンダーとエスニシティのストーリーが相互に作用しあつて、このような誇張した話が生まれたのである。

ジェンダーとエスニシティが相互に作用しあつて誇張した話ができあがるのは、マスキュリニティに関してだけではない。フェミニニティも二つのエスニック・グループの間で対比されて語られたのである。イギリス人の側は、総じて日本の女性は、依存心が強い、男性にこびる、あるいは声の調子が高すぎると評していた。一方、本社から派遣された日本人女性は彼女のフェミニニティの優越を語つた。彼女は、「一般的にいつて、イギリスの女性は強くて。だけど、私は、彼女達そんなに強くなくていいと思うんですよ……イギリスの女の人はみんな素っ気ないとおもうんです」（インタビュール二六、二〇代日本人女性一般職派遣社員）と語り、いかに働く上でフェミニニティが必要かを語つていた。

また、海外派遣社員の中では数の少なかつた総合職日本人女性の一人は録音を止めた後、「この国でフェミニズムが盛んなのは、女性に自由がないからではないかしら。私達は、男性の上司とうまくやっていく方法を知つてゐる。でもイギリスの女性はフェミニズム運動をしなければならぬのでかわいそうだと思う」と（インタビュール二九、四〇代日本人総合職派遣女性。録音の後で）語つた。このストーリーもまた、一般職のしごとを長年続けてきて、雇用機会均等法が成立したときに総合職に変わるまで忍耐強く働い

てきたこの女性の経験がジェンダーとエスニシティに関するこのストーリーを生み出したのである。

しかし、個人で移民した女性のジェンダーとエスニシティのストーリーは派遣社員の日本人女性とは大きく異なる。イギリスにこそフェミニズムの起源があり、女性の権利が実現できる余地があるというストーリーである。彼女達は、イギリスで、「新しい考え方の人達、もつと進歩的な女性達と会え」と、「そんな考え方や世界こそが、私が求めていたものだった」と語っていた（インタビュー一四、四〇代日本人現地雇用女性）。そこに見られるのは、日本におけるジェンダー差別を乗り越えるためにエスニシティを越えようとしたストーリーである。海外に移住した日本の女性も、日系企業をバイパスしてイギリスの中で階層移動を果たそうとしたイギリス人男性と同じように、エスニシティの境界を越えてジェンダー差別を回避し、階層移動を果たそうとしたのである。そして、このように、ジェンダー・クラス・エスニシティによって分断されたマイクロ・ワールドでは、その三要素が、相互に作用しあつてインタビュー達が自分を位置づけるためのストーリーとして使われているのである。

(5) 中核と周縁のストーリー

このように、自分の所属する場所からの壁を越えようとしたインタビュー達は、程度の差こそあれ、アイデンティティの揺れを語っていた。アイデンティティとは「自分は誰であるか」「自分はどこに所属するのか」という認識のことである。国境を越えてあるいはクラスを越えて働くときには、自分をどこに位置づけるかで葛藤が生じる。そうした人々のアイデンティティの認識を支えていたのが世界中核の認識であった。現地管理職の頂点に立つあるイギリス人は、日本の経営ではグローバル金融に対応できないことを指摘し、「君達が西洋の態度と考え方を取り入れていくのであつて、自分達が東洋の考え方に合わせていくのではない……広い意味での世界には一つの波長しかない」と日本に言っている。そしてその一つは西洋の波長だ。日本はそれに波長を合わせていかなければならない。西洋が東洋の波長にあわせることはない」と言い切る（インタビュー三五、四〇代イギリス人上級マネージャー）。しかし、日本人の上級マネージャーは、「平家・海軍・国際派」対「源氏、陸軍、国内派」という、「世界の中核の価値を体現する人々」対「日本というローカルな場でしか通用しない価値をもつ人達」を示すレトリックを用いて、ロンドン在住の日本人金融マン達の立場を語った。一〇〇〇年前の日本の中心で

ある京都に本拠を置く平家は、地方の豪族を従えた源氏に破れてしまった。世界の情勢を見極めて戦争は無謀であると考えた海軍は地方出身の陸軍に権力争いで負けてしまった、というストーリーに対比させて、世界の金融の中心地で仕事をする国際派金融マン達は、地球規模ではローカルな東京市場しか知らない本社の中核にいる国内派金融マン達に負けてしまうのだという（インタビュー四三、五〇代日本人男性派遣社員）。

この二人のストーリーにはヨーロッパ人の普遍主義と、日本人ビジネスマンのもっている多極主義が明快に現れている。そして、世界の核は一つであると語ったイギリス人はその核から来た自分が日本企業の中で政策決定から排除され、自分の意見が受け容れられないことにいらだちと絶望を感じていた。また、この日本人国際派金融マンは、東京本社にいる「国内派」管理職と、アングロサクソン文化が依然として支配する金融世界の中心との間で板挟みになる苦しさを訴えている。一九八〇年代後半から一九九〇年代初頭にかけてのバブル期に衝突したアングロサクソン型資本主義と、アジア型資本主義の衝突が先鋭に現れた金融の世界が、個人の主観的感情に反映していることがみられるのである。

他方、個人で移民した人達は、企業に守られて海外に出

かけた派遣社員よりも大きな振幅をもってアイデンティティの揺れを示していた。日本を飛び出して女性の自由をイギリスで感じたという女性の一人は、保守的な生活を日本で送ってきた「女性のほうが私より幸せなんですよね。彼女達は働かなくてもいいし、子供の面倒を見て家事だけをしていればいいんですよね。その上、日本でいい生活が維持できているんです」と後悔を見せた（インタビュー一四、四〇代日本人現地雇用女性）。この女性が日本を出てから、二〇年の間に日本の経済成長は著しく、彼女は日本の経済的繁栄の恩恵を受け損なったと言っている。伝統的な女性の生き方をした姉の金銭的に楽な生活は、彼女に苦い思いを感じさせていた。

しかし、女性の場合は元々持っていた資源が少なかったのだが、男性の場合は、もしそのまま日本の社会に帰属していれば得られたであろうと予測されるものが大きかっただけに、文化の越境によって失ったものも大きかった。イギリスに企業派遣で留学して、そのまま英国の文化に魅せられてイギリスに残った現地採用の男性は渡英以来日本人を避けてイギリス人の間だけで暮らしてきた。そして、「日本語を一切使わなかった。自分は英語だけを使ってイギリス人だけと生活したんですよ。自分は英語の世界に入り、英語の一部となった」という彼が最後に仕事を得ることが

できた場所は、日本人コミュニティだけだった。

水の表面があって、日本人は、普通は水の下にあるイギリス社会を上から見るんですよ。だけど自分は水の中に入ったんです。それで、自分には水の中から、覗いている日本人の顔が見え当然了。イギリス社会を水面より上から見るのと水面下で見るのではものすごく違いがあるんです。水の上に半分浮いたり沈んだりしているのでは駄目ですよ。自分を完全に水に沈めなければいけないんですよ（インタビュー七九、四〇代日本人現地雇用男性）。

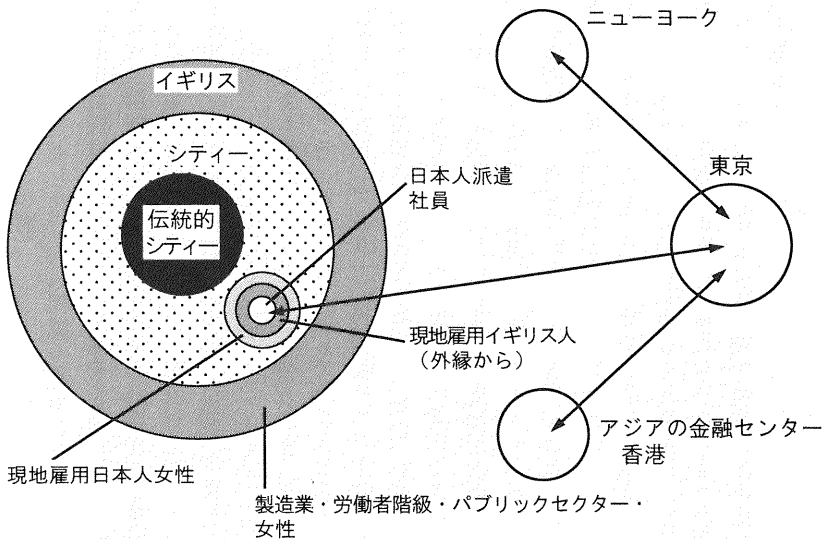
ここで、水の上から悠然とイギリス社会を覗いている顔は企業派遣の日本人の表象で、水の中で溺れているのは彼自身の表象である。彼にとつて、異文化の理解は身を賭しての理解だったにもかかわらず、しかし、彼は終身雇用の特権を失って日本人社会に帰ってくるしかなかったのである。

こうした彼らの主観的世界観を図にすると下のようになるであろう。

日系企業はシティーに参入したが決してシティーの中核には入っていない。また、日系企業で働くイギリス人の多

史苑（第六四卷二号）

図2 主観的世界＝中核と周縁：普遍主義と多極主義



くはシティーの外郭にある製造業、パブリックセクター、労働者階級からシティーに来た人達、そして女性達であった。彼らは日系企業をバイパスにしてイギリス社会の中で階層上昇を果たそうとしていた。日系企業はシティーに会社を構えてもその利益の多くは海外にある日系企業との取引で得ていた。また、彼らは日系企業のグローバルネットワークの中で昇進をしていた。常に東京が中心で東京を見ながら仕事をしているという点で、極めてデリアスポラ的であったといえる。そのような日系企業の中で働く現地イギリス人達は、アングロサクソン文化が支配するシティーの金融ビジネスと、英語文化圏での自分達の文化的な優越が会社内で反映されない日系企業のなかで大きないらだちを感じていた。日系金融コミュニティは会社の中では日本人が力を持ち、会社を一步でるとアングロサクソン文化が力を持ち、内と外とで力関係の逆転が見られたのである。

(6) 境界に生きる

このような、意識の上で構造化された世界で、イギリスの価値観と日本的価値観の境界で極めて不利な立場で働いていたのが、個人で移民した女性達であった。しかし、彼女達は、自分達を「イギリス人とも日本人とも思わない。自分はどこか違うって感じて」いる(インタビュー一五、

五〇代日本人現地雇用女性)。こうした現地採用の日本人女性達は、不況の到来と共に人員削減の対象となっている。ある現地雇用女性は日系企業での解雇を不当だとして裁判を起こして、解雇は不当であると認められたが、結果的にはもう日系企業では働けなくなった。彼女はそれでも、イギリスに来てよかったといい、不当解雇に対して裁判を起こして良かったとも話した。もし裁判を起こさなかったら、きつといつまでも恨んでいただろうと言うのだ。またイギリスに来たからこそ、いろいろと試してみることができたのだと話してくれた。アメリカの投資銀行の日本部門を不況の到来と共に解雇されたある女性は、「結局、私達はもつと強くて、もつと柔軟で、もつと異文化に適應できるのよね(インタビュー四九、四〇代日本人現地雇用女性)」と話していたが、そこには、「境界」に生きる人々のエイジェンシー(主體的自己)が見られた。文化を固定したものとして理解し、その境界で溺れるストーリーではなく、文化自体を液状化させてとらえ、その境界で適應して生きる人々のストーリーであった。二〇世紀最後の四半世紀に生じた金融のグローバル化は、表面には現れないこのような新しいアイデンティティを文化と文化の間の境界に生み出していたのである。

五、解釈と叙述

このように一見無味乾燥な職場が、ジェンダー・クラス・エスニシティが交差する場であり、そこでの語りは、分断された集団の間の心理的な競争、願望、あきらめの入り交じったものであった。グローバル金融の世界は、合理的な世界だというイメージがあるが、実際には、人々の文化アイデンティティ、つまり自分達が規定する文化にいかにか所属するかという主観に大きく影響された世界であった。確かに、人々の人生の履歴を聞くと、また会社での仕事の分断を見ると、ジェンダー・クラス・エスニシティによって人々は分断されていたが、さらにそれ以上に、ジェンダー、クラス、エスニシティのそれぞれが主観的な構造として語られ、時には相互に作用し合ってデフォルメされていたのである。例えば、日本人の男性の性差別主義は頻繁に語られ、イギリス人は怠けているという語りが誇張されていた。また日本では女性は生きづらいほど差別されるというナラティブも誇張である。分断された集団がそれぞれ織りなす語りは、一つの像を結びにくい、ゆがんだ鏡に映った世界のようにであった。ゆがんだ鏡に映し出されている人々の心理的な葛藤と競争、夢と希望、世界の秩序を読み解いていくことが、

オーラル・ヒストリーの解釈の過程であった

妥当性を持って言えることは、第一に、日系企業が円高の恩恵を受けてシティーに築いた日系金融コミュニティでは、イギリス人と日本人の間で単一の支配的言説が成立しえない状況にあったことである。つまり、アングロサクソンの金融ビジネスをよしとするイギリス人社員と日本人の防衛的文化アイデンティティの衝突が、日本の金融ビジネスの失敗に影響したと言えるであろう。また日本人派遣社員自身がシティーの中核に入り得なかったことも失敗の原因だったと推察される。第二に言えることは、対立するそれぞれの文化内においては、男性管理職の語りが支配的言説となり、単一の文化アイデンティティとして語られていたことである。実際には、男性管理職グループの語りの陰にジェンダーやクラスによって異なる語りがあったが、それらは表には出てこない語りであった。しかし、グローバル化の進展の中で、境界に生きる人々が、新たなアイデンティティを形成し、スチュアート・ホールやホーミ・バーバーがいうところの新たな自己認識を持つ可能性を、インタビューは示していた。

おわりに

シティー・オヴ・ロンドンには、かつてはイギリスの金融資本主義の牙城であり、イギリスの支配層と強いつながりを持って、イギリス的な金融文化を形成していた。しかし、一九七〇年以降急速に進んだ国際化によって、その文化は大きく変容していった。かつてウイナーが指摘した、ジェントルマン資本主義がイギリスの産業者精神を衰退させたという批判はもはや当たらない。イギリス的なもの自体が衰退しつつある。その大きな要因がサッチャー政権によって断行された金融ビッグバンによる外国金融機関の導入であった。合衆国やドイツの金融機関に引き続き、日系金融機関の進出もその変化の一因となっていたのである。しかし日系金融機関の大規模な参入は初めてのことであり、文化的衝突がオフイスという小さな世界において生じたのである。筆者の調査は、その変容の過程を、人類学、社会学、歴史学の境界領域にある研究方法であるオーラル・ヒストリーの手法によって考察したものである。

最近では、オーラル・ヒストリーの重要性が盛んに言われるようになったが、その具体的な手法が議論されることはまだ少ない。したがって本稿においては、主としてオーラル・ヒストリーの方法論に焦点をあてて考察してみた。

（酒井）

筆者は、インタビューを録音し、書き起こしてそのテキストとフィールドノートを基に、語られた事実、人間関係、その背後にある感情や思いこみを順次考察することによって徐々に考察を深めていき、最後に文化アイデンティティの概念に到達したのであり、その方法は極めて人類的であった。またその書き方は叙述的な民族誌の様式をとることとなった。

オーラル・ヒストリーの方法論を深めていくためには、より体系的なインタビュー分析の可能性を探る必要がある、またライフ・ストーリーを使った調査を叙述するにあたって、分析的な記述と叙述的な記述をどのように組み合わせるべきかという課題が残った。

注

(1) 現代のオーラル・ヒストリーの研究成果をまとめたものとしては、ポール・トンプソン（酒井順子訳）『記憶から歴史へーオーラル・ヒストリーの世界』、青木書店、二〇〇二年が最も包括的である。原著は、Paul Thompson, *The Voice of the Past*, the third edition, Oxford: Oxford University Press, 2000. そのほか、Robert Perks and Alistair Thomson, *The Oral History Reader*, London: Routledge, 1998 が、オーラル・ヒストリー研究が発展してきた過程で画期となった論文を収集している。

(2) オーラル・ヒストリーの学際性については、ポール・トン

ブソンが二〇〇三年三月に来日の折、慶応大学で講演をしている。ポール・トンブソン(酒井順子訳)「オーラル・ヒストリーの可能性と日本との関連」『三田学会雑誌』、九六巻三号、二〇〇三年、一七―三九頁。

(3) 日本におけるオーラル・ヒストリーについて包括的に検討したものはまだない。筆者も日本におけるオーラル・ヒストリーの現在を考察してみることを試みて、ポール・トンブソン「記憶から歴史へ」に補章として収めた。「公人のオーラル・ヒストリー」という分野を提唱している御厨貴の『オーラル・ヒストリー』口述史としての現代史は政治家や経済界の著名人へのインタビューを中心に日本におけるオーラル・ヒストリーの可能性をまとめている。日本では一九八七年に『歴史学研究』(五六八号)においてオーラル・ヒストリーの特集が組まれ、オーラル・ヒストリーが方法論として発展していくかと思われたが、口述の史料の信頼性への疑問から、オーラル・ヒストリーは学術的な研究方法としては承認されてはこなかった。しかし最近では、史料保存の観点から再びオーラル・ヒストリーへの関心が高まり、本格的なオーラル・ヒストリー・アーカイヴスを作ろうとする動きや庶民の声を聞き取ることを目的とする活動も盛んになってきている。公人の声を聞き取るオーラル・ヒストリーも既にのべ一〇〇〇回分のインタビューを集めたという。オーラル・ヒストリーの具体的方法論の発展を目指して、学際的で、そしてオーラル・ヒストリーの民主的な発展過程を生かした方法論の議論をしていくことが今期待されている。

(4) 筆者の調査の全容については以下を参照。 Junko Sakai, *The Clash of Economic Cultures, New Jersey* :

史苑(第六四卷二号)

(Transaction Publishers, May 2004 (Forthcoming)); Junko Sakai, *Japanese Bankers in the City of London: Language, culture and identity in the Japanese diaspora*, Routledge, 2000. 酒井順子「ジェンダーとグローバルゼーション日本人のディアスポラ」、中牧弘允、ミッチ・セジウィック『日本の組織の人類学―社縁文化とインフォーマル活動』、東方出版、二〇〇三年七月、七七一―九八頁。酒井順子「国境を越える女性労働者―イギリスにおける日本女性労働者のライフストーリー」『女性労働研究』、四二号、二〇〇二年、一二七―一三五頁。

(5) 例えば、M.J.Weiner, *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit, 1850-1980*, Cambridge : Cambridge University Press, 1981 (トーマス・ウーナ『英国産業精神の衰退―文化史的接近』、原剛訳、勁草書房、一九八四年)；G. Ingham, *Capitalism Divided? The City and Industry in British Social Development*, Basingstoke : Macmillan, 1984; Anthony Hilton, *City within a State: A Portrait of Britain's Financial World*, London : Tauris, 1987 など、シティの金融業が国内の製造業を支援しなかったことを批判。シティの人的ネットワークを批判したものとして、Jeremy Paxman, *Friends in High Places: Who Runs Britain?* London : Penguin, 1990 などがよく知られている。

(6) David Kynaston, *The City of London: A world of on its own 1815-1890*, Vol.1, London : Pimlico, 1994 ; *The City of London: Golden years 1890-1914*, Vol.2, London : Pimlico, 1995 ; *The City of London: Illusions of gold*

シナイターの田塚金穂『ロンドンシナイターのキーンズ・ロンドンリー調査(興牛)』

- 1914-1945, Vol. 3, London : Pimlico, 1999 ; *The City of London : A club no more 1945-2000*, Vol.4, London : Pimlico, 2001.
- (7) Cathy Courtney and Paul Thompson, *City Lines : The changing voices of British Finance*, Methuen, 1996.
- (8) 一九九六年、オーソール・ロンドンリー研究者が導いた「金融史を人類学的参与観察やインタビューにより「掘り出し」を掘り出す」コーンシモンズ・オウ・インタナショナル・ワークショップ。Researching Financial Elites Workshop at the Bank of England on 6-7 November 1996, organised by Paul Thompson.
- (9) Judith Okely, and Helen Callaway, *Anthropology and Autobiography*, London : Routledge, 1992.
- (10) Natalie Zemon Davis, “Women’s History” in *Transition : The European Case, Feminist Studies*, 3, nos. 3-4, 1976, pp.83-103.
- (11) Leonore Davidoff and Catherine Hall, *Family Fortunes : Men and Women of the English Middle Class 1780-1850*, London : Hutchinson, 1987.
- (12) イギリスの社会調査は、女性の階級は父親や夫に代表をせられたので、女性個人の階級を社会調査に反映させることはできなかった。しかし、こうした従来の社会調査の方法は、女性の階級を独立に考察する必要があると批判された。
- (13) Daniel Bertaux and Paul Thompson, *Pathways to Social Class : A Qualitative Approach to Social Mobility*, Oxford : Clarendon Press, 1997.
- (14) Catherine Hall, *White, Male and Middle Class : Explorations in Feminism and History*, Cambridge : Polity, 1992.
- (15) イギリスの近代エスニック・ロンドンとイギリス・フランス・エスニックの関係を考察したのが、Floya Anthias, *Gender, Race and Class : The Problem of Social Division*, New York-New York University Press, 1997 ; Floya Anthias, *Ethnicity, Class, Gender and Migration: Greek-Cypriots in Britain*, London : Ashgate, 1992.
- (16) Robin Cohen, *Global Diasporas*, London : Routledge, 1997.
- (17) Stuart Hall, David Held and Tony McGrew eds., *Modernity and its Future*, Polity Press, 1992; Paul Gilroy, *The Black Atlantic*, London : Verso, 1993.
- (18) Harumi Befu, ‘Globalization as Human Dispersal : From the perspective of Japan’ in J.S. Eades, Tom Gill and Harumi Befu eds., *Globalization and Social Change in Contemporary Japan*, Trans Pacific Press, 2000, pp.17-40.
- (19) Paul White, ‘The Japanese in London: Processes of community formation’, paper Presented to the Symposium on Immigration Policy in Japan, EU and North America, Kobe Institute, Japan, 11-14 April, 2000 ; Paul White, ‘The Settlement Patterns of Developed World Migrants in London’, *Urban Studies*, Vol. 35, No. 10, 1998, pp. 1725-1744.
- (20) Keiko Itoh, *The Japanese Community in Pre-war*

- Britain : From integration to disintegration*, Richmond, Curzon, 2001. 二〇世紀初頭から、第二次大戦で在英日本人が強制送還されたり、ブリティッシュ・アイランドに収容されたりして、日系ロッキンビリーが崩壊するまでの歴史を扱ったこの研究も詳細なオーラル・ヒストリー・インタビューによるものである。
- (15) Stuart Hallの支配的意識に関する議論は、以下を参照して。Stuart Hall, 'The Question of Cultural Identity', in Stuart Hall, David Held and Tony Acredgrew eds, *Modernity and its Futures*, Cambridge, Polity Press in Association with the Open University, 1992.
- (16) Interview with Stuart Hall by Martin Jacques, 'The Great Moving Centre Show', *New Statesman*, 21 November, 1997, p.27.
- (17) Ross Mauer and Yoshio Sugimoto, *Images of Japanese Society : A Study in the social construction of reality*, London : Kegan Paul International, 1986.
- (18) Stuart Hall, 'Old and New Identities, Old and New Ethnicities', in Anthony D. King, ed., *Culture, Globalization and the World-System : Contemporary conditions for the representation of identity*, Macmillan, 1991, pp.41-68.
- (19) Homi Bhabha, *The Location of Culture*, London : Routledge, 1994.
- (20) Ken Plummer, *Documents of Life 2 : An invitation to a critical humanism*, London : Sage Publications, 2001, p.46.
- (21) ホール・アンソニー、前掲書「四六六〜」。
- (22) タニエル・バルターのライフ・ストーリー社会学に関して、以下を参照。Daniel Bertaux, *Life Stories*, Sage Publications, 2003. 翻訳書としてはタニエル・バルター(小林多寿子訳)『ライフストーリー エスノ社会学的ナースペンテイズ』、『ネエズ』書房、二〇〇三年がある。
- (23) Trevor Lummis, 'Structure and Validity in Oral Evidence', Robert Perks and Alistair Thomson eds, *The Oral History Reader*, Routledge, 1998, pp.273-283.
- (24) Penny Summerfield, 'Dis/composing the subject: Intersubjectivities in oral history', in Tess Cosslett, Celia Lury and Penny Summerfield eds, *Feminism and Autobiography : Texts, Theories, Methods*, Routledge, 2000.
- (25) ホール・アンソニー、前掲論文。
- (26) Ken Plummer, *op.cit.*, pp.185-203.
- (27) ホール・アンソニー、前掲書「四六六〜」。
- (28) Raphael Samuel and Paul Thompson eds, *The Myths We Live By*, London : Routledge, 1990.
- (29) ホール・アンソニーは、以下を参照。Mary Chamberlain and Paul Thompson eds, *Narrative and Genre*, London : Routledge, 1993 ; Elizabeth Tonkin, *Narrating Our Pasts*, Cambridge University Press, 1992 ; Alessandro Portelli, *The Battle of Valle Giulia*, Madison : University of Wisconsin Press, 1997.
- (30) Ken Plummer, *Telling Sexual Stories : Power, change and social worlds*, London : Routledge, 1995 (六

シテイーの日系金融コミュニティでのオーラル・ヒストリー調査(酒井)

- ン・プラマー(好井裕明、桜井厚、小林多寿子訳)『セクシュアル・ストーリーの時代―語りのポリティックス』、新曜社、一九九八年)。
- (37) Penny Summerfield, *Reconstructing Women's Wartime Lives : Discourse and subjectivity in oral history of the Second World War*, Manchester: Manchester University Press, 1998.
- (38) Alistair Thomson, *Anzac Memories : Living with the legend*, Melbourne : Oxford University Press, 1994.
- (39) Mary Chamberlain, *Narratives of Exile and Return*, Basingstoke : Macmillan, 1997.
- (40) Penny Summerfield, *op.cit.*, pp.91-106.
- (41) Steiner Kyale, 'Interpretation of the Qualitative Research Interview' in Florence J. Van Zuuren, Frederic J. Wertz and Bep Mook eds, *Advances in Qualitative Psychology*, Netherlands : Swets Publishing Service, 1987, p.31-33.
- (42) インタビューの中では、あたかも日系金融機関には白人のイギリス人しかいないかのように語られたが、日系金融機関で働く人々は、移民も含めてヨーロッパ、国籍所有者もたくさんいるので、シテイーの日系金融機関で働く人達は「日本人」対「白人イギリス人」であったという構図を作るわけにはいかない。筆者がたまたま紹介されてインタビューをした人達が白人イギリス人であっただけである。
- (43) データ対話型理論については以下を参照。アンセルム・ストラウス、ジュリエット・コービン(南裕子、操華子訳)『質的研究の基礎―グラウンデッド・セオリーの技法と手順』、
- 医学書院、一九九九年。バーニー・G・グレイザー、アンセルム・ストラウス、(後藤隆、水野節夫訳)『データ対話型理論の発見―調査からいかに理論をうみだすか』、新曜社、一九九六年。
- (44) Ken Plummer, *op.cit.*, 2000, pp.24-25.
- (45) 桜井厚『インタビューの社会学』、せりか書房、二〇〇二年。
- (46) 桜井厚編『ライフ・ストーリーとジェンダー』、せりか書房、二〇〇三年。
- (47) Ryuzo Sato, Richard M. Levich and Rama V. Ramachandran, *Japan, Europe and International Financial Markets : Analytical and Empirical Perspectives*, Cambridge : Cambridge University Press, 1994.
- (48) Ronald Dore, *British Factory, Japanese Factory : The origins of national diversity in industrial relations*, London : Allen and Unwin, 1973 ((ロナルド・ドーア(山之内靖、永島浩一訳)『イギリスの工場、日本の工場―労使関係の比較社会学』、筑摩書房、一九八七年)。
- (49) 筆者が本研究を PhD 論文としてまとめた一九九〇年代半ばには「日本化」に関する本が次々と出版されていた。例えば、Nick Oliver and Barry Wilkinson, *The Japansation of British Industry*, Oxford: Blackwell, 1988; Masahiko Aoki and Ronald Dore eds, *The Japanese Firm : The source of competitive strength*, Oxford : Oxford University Press, 1994 ; Tony Elger and Chris Smith eds, *Global Japansation : The transnational*

transformation of the labour process, London : Routledge, 1994.

(50) ポール・トンフソン、前掲書、五〇一―五〇二頁。

(51) 今日のイギリスの社会調査では、インフォーマントのクラスを職業で分類している。

(52) Linda McDowell, *Capital Culture : Gender at work in the City*, Oxford : Blackwell, 1997.

(53) Peter Popham, 'A Love Affair at Work Turns Sour', *Independent* (Section 2), 15 May, 1996, pp.1-3.

(立教大学非常勤講師)

Oral History of the Japanese Financial Community in the City of London : Analysing Narratives at the Intersection of Gender, Class and Ethnicity

by SAKAI, Junko

Oral history/life story methods have flourished in English speaking countries and other areas in the world for more than thirty years. In Japan, oral history has just been recognized as a powerful research method for historical, sociological and cultural studies, though similar methods have already been used in many

disciplines. It is now urgent to develop methodological discussions, particularly regarding how to analyse oral narratives that are not necessarily 'truth' but important for 'meaning'.

This paper reviews the author's own research on the Japanese financial community, which was published as *Japanese Bankers in the City of London : Language, culture and identity in the Japanese diaspora*, (Routledge, 2000). This financial market has become more international since the 1970s, especially during the Thatcher government. As a result, the market no longer represents the 'Englishness' of British business culture, and is instead a multi-cultural community. Japanese financial institutions have also participated in the change as economic actors.

In this article, life stories of workers in Japanese institutions, the newcomer to the City, showed the power relationships among workers at the crossroad of gender, class and ethnicity. People talked about differences in their ways of conducting businesses, work cultures, and more generally, cultures in society, as if such cultural diversity had been essential. Narratives in fact reflected power relationships within the organization and in the City. Narrative stories pointed out gender inequalities, social mobility, and ethnic differences. However, stories seemed to have been exaggerated, distorted, or being suppressed, and the paper illustrates how the author analysed the meaning of such 'unreliable' stories in relation to gender, class and ethnicity.

People who worked in the midst of the change in the City of London have collectively constructed a subjective world map of the core and the periphery which was perceived as rigidly structured. However, it seems that the boundaries are being transcended and people have started to have new identities that are not fixed to the 'old' world order.

Thus, the author has shown her own experimental ways of analysing oral narratives in historical and sociological work. The author is hoping to continue further examination of how to analyse data and how to combine analyses and words in oral history writing.